假字本末

上巻之上

ホ 2
1329
1

加賀
1321
1-4

伴信友大人遺稿

假字本末

全部四冊

皇都

三書堂梓

この假字本末は伴信友大人の著されし書にて
假字といふもの 皇國に用ひ来りしゆゑよりを
始めとして平假字片仮男文字女文字
起原をたづねて考へまた俗にまた用ひ訓
は伊呂波うたあるは梵讃漢讃和讃あるを今相
手叱礼歌をヨコト題といふものゆゑの及
神代字は事にて抵牝ひ来し次第を

こゝ〳〵に一篇へ記されたる考説のつを
らゝおのれいさゝかいそんをなす〳〵なれと
古とて是をよくうちみむる事(ウチカヘ)成をもある
毎に前つゆいそれ書れ考説を原
さんいと〳〵かるしわさるに年ときほとよ
りとより解得(トキエ)わきとおもへしに況(ヒト)の説の多く
そひなわるゝ又うかりしてとゝやう〳〵考出られる

なとあゆふけるとそれゆゑ此人をこれを未素
のちるとり出とくいあるの如くして夢とりの
誤るとしめ生涯(イキノカギリ)つとむるもいとく
うきとうるとしされをそをを抜て取なく
せんよハほの悔(ジ)やみたひをもとわうとまを
ものならすと教(ゼ)されてわるとまを用とは家の
著書とそれとよくゆんそ〳〵らんぬ

つゝくく世書も例のくかゝゝと書補されて
反古のやうゝそあわゝまゝとゝしある人の請へる
ゝてり信近の校訂して板るゝとゝやるゝ例とゝ
ちくは新のゝゝろおよてに学ゝひやちん学
いゝくおもひとつゝひくいてりの為ゝし
なと序よも徳ひぬされと学世よおゝきはゝて
あらゝんいゝのゝて詩しのひとうゝん添ゝし

制ゝきゝんうゝれはゝこの遺稿をゝそやゝて
新ゝ清ゝゝのゝゝ無ゝのわけはゝて後ゝて世ろ
うゝはいゝちゝまゝ学者ゝちの信近のゝ
せゝゝゝゝくその遺稿ゝみゝくゝするゝ
ゝろやゝくゝゝゝ義のゝろゝゝを世ゝる
あゝゝくいゝゝもゝゝの志ゝゝく止事ゝゝ
得ぬゆゝのゝのわゝゝゝ由ゝゝの道義の

著述目録概言を記されたりしかども
きのふとゝ板するゝ為ら未だ成れるまんこく
信近の為つ求るゝ人多きゆゑ
ねんこに

嘉永三年三月

長澤伴雄

記念文庫 信夫恕斯翁記念 文庫 大正三年四月 信夫淳平氏寄贈

假字考本末上巻之上

伴信友 稿

草假字

上代ゝ文字と云ふもの〳〵無の事ハ。大同三年に。齋部廣成宿祢の。撰ぶて上れる古語拾遺の序ゝ。蓋聞上古之世未有文字。貴賤老少口口相傳前言往行存而不忘云云。と見えたり。今古典ゝ據て推稽ふるにも。真ゝ然る事ありける。大江匡房卿の。筥崎宮記ゝ。尋其書文字代結縄之政。即創於本體應神天皇之神靈也。我朝始於此朝云云。と朝野群載ゝ見えたる。三善清行朝臣の昌泰三年付勘文ゝ。上古之事出口傳。ともいひ。然るに貞治弘古ろ。忌部正通宿祢の著せる傳ゝ。安傳宮ぞ聞えと云へるも。さるを其口決の凡例ゝ。神道自不異二教者。天地道理也。と說ひて。もはら儒

記念文庫 信夫恕斯翁記念 文庫 大正三年四月 信夫淳平氏寄贈

佛の道の趣をもて。神代紀を解けるが。いと見識ある人の説なれば。などに信ずべし。また清原宣賢朝臣の大永年中に注されたる神代紀抄に。卜部氏の秘説なりとて。亀卜に注されたるよりて。一万五千三百七十九卦なる出来るなり。神代字なれなりて。其字声明の譜に似たる由注せり。此主は本生卜部の氏人にて。兼倶卿の弟なる例の卜部家の造説論ふにもあらば。天正六年に玄仍が記せる榻鳴暁筆の追加に。神代の字ハ非漢字。聖徳太子舊事紀を被撰時始て漢字に成なふなりと見え。慶長四年清原國賢朝臣の記されたる日本書紀の跋に。聖徳太子察三才之源。達三國之起。故始以漢字附神代之文字。傍於于爰吾邦人浸得識量典經之旨云云。蓋神道者為萬法之根柢。儒教者為枝葉。佛教者為花實。と云るをのせるも。かの卜部家の私説によりときなえさり。さもふ論ふにまらば。國賢主ハ。かの宣賢主の玄孫なり。それの前にもかの卜部家に。此説のおとくにはあらでり。別に上代に文字の有しといふさかれもひよせてさる考のありしかど。非ずおもむありて。神代字辨を著して。此書の附録として。かくて今なほらく考ふるに。漢字

を召とりて。用ゐたまへる世となりて後。[この漢字の事ハ。中外經緯傳の中に論へり。]なべての事ハ。漢文ざまに書て其意を達し。歌。祝詞。詔詞。などの書記。言辞を主とせるうさには。もはら字音を假用ゐて書違らね。まほしくには字訓を假り交へたるもありぬべし。これすなはち假字なる。さて字に真字と云ひ。假字と云ふなるは。藤原長親卿の倭片假字反切義解の序に。[此書ハ。權大納言藤原長親卿。僧名妙魏の著なへるなり。なほ下巻片假字の條に引て論ふべし。]夙聞大古之代。未有漢字。云云。及乎應神天皇御世。始渡儒經。而凡國家用文字。有真字。有假字。真字對假字正也。假字對真字權也。字名義即

物名也。字名義云云とハ。字を奈と云ふ由ハ。何ゝまれ。物名を記す義。ありと説へる事り。天武紀ゝ新字とあるを。古訓ゝニヒナとあり。さて假字を正しく。ハ。加利奈と云ふべきを。言便ゝ加無奈と云ふ。又加奈とも云ふ。都不過於以義為真字。真字とハ。漢字を云へり。義を主とすと事り。音為假字而已。漢字音を假借りて。皇國言の聲ゝ當てゝ用ふを。假字と云ふ。云云。と説ち給とるゞおもし。事わいたゝ。字義ゝよりて訓をさゞめてなむゝなりてを。神名。人名。地名。まゝ漢名知られぬ物名ゝ事ゝ類ハ。その言ゝさまにゝりて。便よく音訓をとり交へ事どゝしても書記したりしゝ事るゝ。かくて漸漢字を用ゐ事ゝ事ゝ。祝詞。詔詞。おどの如ゝ。言辞を書とゝのふるにハ。字

數のゝまりゝ多く事ゝて煩はしけ給ハ。音訓を交へ書記。或ハ訓をとりて借字とし。或ハ字義によりて。言辞ゝ當事ゝしても書ゝりなむ。古事記の序ゝ其書れゝ。已因訓述者詞不逮心。全以音連者事趣更長。是以今或一句之中交用音訓。或一事之内全以訓録。と云をれゝ。ゝるゝおどおもゝ先ぐらして推考ふばし。然るゝ歌ゝ殊ゝ歌ふものゝおれば。一言もゝみゝがへゞと。音假字もて書連ぬる事ゝらむゝてぞありなむ。ゝゝ事ゝ考ハ。古のおもむゝを考へ。古事記。日本紀。そのほゝ古文れ記されざま事どを考合せて論へる事り。さて歌ゝすゝとる人ゝおどの。尋常れのゝがゝみゝある。まゝ古今の人々のを書とゞむと。

數首ものせむよも。真字書にのこいえ堪ぐ〳〵紀ヨざ
形きバ。おのゞから草體ヨ書くるも多かりけむ。又字數の
多きをいとゑて常ヨ用ひ熟れたる文字れ訓を書交
ふる事も有〻あるばし。但〻万葉集ヨ音假字もて書
はらねとる。又音訓書交へたるおども多ゝれど。おゝと
義訓。畧訓。借訓形どいふばき字の用ひざまヨ書さる
ちと少あらばい字のやゝれ戯書さへあるはそのゝ
み。おとに歌をすれもてはやせるとも。がらのおゝ形き
ゑとりのゝとくゝもものとゝゝ書〻るゝおける。或い
心あひ形友どち歌ヨをて書かたゝ形どせ弟ヨをわ
ざと打ゝ〳〵ぶゝるばゝりヨ。殊さらヨあくみて書あ
せるもの形るを。其まヨ書集免ゝるものの形弟ばゝ。
かくてその歌の本書形。草に書たりゝもゝのりぬべく。
又万葉集ヨ書と〳〵のへる本を。寫せる人の草れ手
をも交へ書ゝる我。後ヨ真行おどの手に書寫せる本
形。今の世まで遺り傳れるものあるばし。故今在る時
本の讀ゞとれ字を。草體ヨよりて免ぐらゝ考ふる
い。よゝ得らゝゞ多れにもおゝひ合ばべゝ。然草書

よりて考ふる事い。はやく賀茂真淵翁れとも形き
バ論なれゝる説ヨて。まおとに然る事あり。れのれち
ゝ頃東大寺ヨ納免傳多る。天平勝寶九歳三月廿五日。
中務卿の宣命形當時の書れ摹を見るに。多く草體を
用ひ。中ヨい見も志らぬ異體形るかきざまもゝりおヨ
た近似とる誤字さへヨあゝらでも。讀ゝりて。上文ヨあゝらでも。讀
とりゞたきざゝりて。おゝ。おゝざら免書ゝる字すくく形ゝら
ば。其ほゝ。その御世に近れ文書どもの摹を見るに。れ
ほやけどの文書ヨすゝら。さるかれざまも形弟ゞ多かり。
今そ形らをなほざりに書ゝりしたらむヨい。とりどり
りヨゝれゑゞ免つべし。おきをもおもひあをはべし。
さるい万葉集のみおゝらばすべて古書どもの誤字を
訂さむヨい。ゝへすゝ〻にお形。その
心おきてすべき事に。かくて。志ゝ書熟ゝ〻ほ
ど。おゝさらにあゞらゝらヨ走書にかき形せるゞ。漸ヨ
うゝりゆれゝ。おのづゝから一體のおとゝくヨそ形りた
りゝむ。國花集といふ書れ中ヨ。此書作者を志らば。寛文十二年の印本ゝり。

中むらしの人の詩作れ糅ゝ編とる書
ゆり五山ゆ僧おどるもやはりとむ。國花合記集。貞
元進士花艶谷選と標て。乾坤氣形支體飲食ゆど部類
して。其事物の皇國言を漢字音をもて寫し記し。其下
ゆ漢名を當て注せる抄載たる中に。

都嗜月。　鬼記同。　土宜同。　屠き同。　つき同。
屠其同。　土期同。　津幾同。

かく書り。あの國花合記集といへるハ。花艶谷が選べ
る書ゆ名のおとくたこゆれど。此本書を國
花集と称へバ。混らもしくも聞也。ゆわ漢學せる人ゆ
尋問ふばし。いづきゆも件の文ゆ。花艶谷が選べる書
の文ゆる事ハ著し。都て二百餘言載たる中ゆ。多く件の二字を
草假字に書るも。艶谷が本書のまゝゆ寫傳へたるも

ゆ。其もの國人ゆ。皇國人ゆ逢て言語を問て。自
ら書も記し。まゝ皇國人の書て與へたるゆ。ゆ寫と
ど名ある中ゆ。草假字ゆ書たるもゆりたるをもさゆ
がらとりくに交へ記せるものゆ。ゆ。津幾と書る津字も。
皇國の訓假字なれバ。ゆきもこゆゝの人の書て見せ
たるまゝゆ。寫記せるものゆるべきにゆりひ合ゆべ
し。件ゆ書選べる艶谷を。貞元進士といゆ。ゆるその貞元
む。唐の德宗が世の年號ゆて。その元年ハ。皇朝ゆ延曆
四年に當れり。空海。最澄等ハ。延曆廿三年。かの國ゆ貞
元二十年ゆ。彼國に渡りゝれゆ。此二僧等ゆ問注せる
も有べく。又既く皇國言を問聞て記しおける書より。

取て載たるみてもあるべきなり。いづきよりも延暦の頃。ば
やく草假字をも用むたりし證とはべし。上よ論へるとハたるう
ふ後のよハのきど。古き文書どもを見るよ。其道々よ
定まりて常用ふる字を。きむ先〳〵る草體にものして。
其本字のもらきぬむ。そろりよ書く例形りと見せるかあう
すく形からば。其ゞ中よむ。今の世までも用ふるかあう
る形り。又近世よも同じおもむき形る書ざま多く。う
ちとけがきの消息ぶるゝ。女のふハ殊よ多くり。くうう
つろひ行ハ。おのづらのいきほひ形るべれ事を。上ゝ
世よもめぐらして。思ひやるばし。漢國よてはやくよ
り書牘よ。幸甚を。頓首を。形ど書るもむ
た思合すば。形ハ其うつろへるおもむれハ。〳〵下
よもいふべし。相ゝよ
はしてさとるべし。
さてその假字ハ一體のゝ〳〵れ
たるも。書く人のゝ〳〵ろ〳〵にものせるゝら。其用ふ
る假字も。とり〳〵よ〳〵定まらば。又その字體も。おの

ばゝら筆の勢むふまゝ形ゞして。うちよむに煩を
しくはゞさまゞらむしきゝも有ぬばきを。ゝゝ下
ざまのものに及ぶばゝり。あまねく文字ハ行ちきざ
る世形りゝ形む。女童形どハさらよゝ。書讀み字書く
道ふ疎き。下ざまれものゝおど形。うちはゝせて用ふば
れよもあらざゝゝむを。空海僧都。その草體ハ假字よ
りとづきて。さらに目安く形〳〵ら先書て。四十七音の
字體を製り定めゝ。已ゞ尊べる佛法の意を演て。いろ
はにほへと云々ハ讃歌よ作りとゝハへ書つけて。文
字ゝらぬ者どもふ。其歌をその假字ふはゝくゝ。讀習は

ー免書習はー免たるものゝあむなりける。さて其空海ゝいろは假字作まる證も。凌雲集ゝ載たる。此書序文の首ゝ。從五位上左馬頭兼内蔵頭美濃守臣小野朝臣岑守上。とはり。從五位下内膳正仲雄王の。謁海上人と題る詩句ゝ。道者良雖衆勝會不易遇寢興思馬鳴。俯仰謁龍樹。一得遭吾師。帰貧□寓住。飛流馴道眼。動殖潤慈澍。字母弘三乗。真言演四句。云云。と見えたり。海上人とは空海なり。件の句中にいはゆる。字母弘三乗真言演四句とは。空海ゝいろは歌製まる事を讃まるまて。是ぞ其の假字製れる事ゝ。明なる證なりける。倭片假字反切義解ゝ序ゝ。弘仁天長年中。弘法大師釋空海造四十七字伊呂波。四十五字増補園以便于女童。其體則草書也。と見え行阿定家卿と時の人なり。の假字遣ゝ序ゝも。権者ゝ製作ゝして。真名ゝ極草の字を伊呂波ゝ縮免ゝし て云々。と云へり。又河海抄源氏物語梅枝巻の條。江談云。天仁二年八月日。向小一條亭言談之次問曰。假字手本者何時始起乎。又何人所作哉答云。弘法大師御作云々。件事無所見。但大女御御自筆假字法華經供養之時被行御八講講師南北英才。相遊為導師。高名清範慶祚等之輩。各振冨樓那之辨才之後。源信僧都又勤此事。説云。日本國者誠雖為如来之金言。唯以假字可奉書也。弘法大師

傳習諸真言梵字悉曇等密法之後寄四教法文作イロ
ハニホヘド讃給以来一切法文聖経史書経典不離此
讃文字イロハニホヘド字色ハ匂ヘドト云心也不説他
事只以此一事令講而人々皆驚耳之由所傳聞也古人
日記中在此事云々云々簾中抄ハ者の一字ハ作り源信ハ寛仁元年齢六十ハて
卒りし人なり又問云然者件弘法大師御時以往無假名歟日
本紀中假名之日本紀在之由慮外令見答云此事尤理
也雖然只付倭言合之書也イロハニ於テハ尚彼時始ル
歟先哲可尋也件の文今世ハ遺在る江談ハ缺ぬ簾中抄ハ假名起と云へる
下ハ全く載ぬ二書互ハ脱字誤字ありを以ま又其
二書の異本どもハ校合せて訂して引りさて件の

文中に假名之日本紀在之由慮外令見とハいろは假
名ハて書たる日本紀を出して書の有きハはやくよりいろは假名ハ
大師ハ作きりと云へるありしあるばし然れど弘法
説ハ立がたかるべし難為
日本紀の舊文にも所ら付倭言合之書也とハ此
へる由なり答ハ付倭言合之書也
て假名ハて書きるもの
尾崎雅嘉が群書一覽ハ假字日本紀三十巻巻首に日
本書紀と題せり全文をもて志るし漢字ハ
ハ傍ハ和訓をつけり此本足利家時代の縉紳家れ
寄合書ハて字體も
けきる和訓ハ先ハ或人のいへる如く代々の私記の
訓とおぼし知もの多し頃日一本を得さるをもて
の書體をあらハ志るしもの多ハりと云へり件の假名
之日本紀とハいへると同書ハやはらむ釈日本紀
ハ假名日本紀と云ふを引て大殿殿下御書也と訓を注せ
り此本も私記のおとく真假字ハ
る書と見えたり但し其も已ぬる残缺本ありし
ハたところむ
ハたところ思ひまがふばかりに引

まて頭阿法師の高野日

記に。高野山ゑ上りて。綱元入道が庵ゑ宿たる條海象高野寺の僧なり。ゆかりの縁ある事どものとまふ中ゑ。大師此山をひらかせゆひて。堂たてさせふに。木ゆき道の多くみ。文字ゆき事を知らねば。ゆかるしゆきべき料料字一本ゑ。もゆかしとそ。あとゆり。いろはの四十八字を。ゆかしへさせゆひしより。末の世の人ゆ多くけゆもゆりぬとゆあ。侍りしかば。さらばとれりひて。いろはを冠おれきて。四十八首をつぐり出し影前ゑそおふ。と云ひて歌ゆり。寛後ゆ歌ゑ。京見ぬもよく知る人もとゆふれば。みおむかひ申くちかひなりけり。とえゑり。但し海象がいろはの四十

八字と云へるも。後ゑ京字を加へ書くならひとゆき る上をもて談れるにて。頓阿もそれよりて。歌ゑもちゆる ゆて。もそより空海のものせるゑもゆらば。後人ゆ書加へ者るゆゆらひとなりしもの ゆり。此事ハゆ下ゑ論ふべし。空海の高野山ゑ寺建立創さるハ。弘仁十年の事ゆる由。書どもゑ見えるに。かの倭片假字反切義解ゆ序ゑ。弘仁天長年中ゑ。造四十七字。伊呂波。と云へるも合へり。若狭國遠敷郡野代村。妙樂寺ゑ。延暦十六年ゑ。空海の建たりと云ふ金堂一宇今ゑ存て。空海ゆ自書る棟簡も在り。まゑ其寺ゑて書たると云ふ大般若經全部と。其時用ひたりと云へる硯も今ゑ在り。過ゑし文化四年の頃。かの金堂いさく破壊たりゑるを修理ふとて。工もゆ。柱の枘接ゆど取解けるゑ。ゆべてハいろは字

形どもを待合すべき處なり。東西南北の字と。方圓三角なぞ。象をものしたり。むかし此寺作りし工等ハ。いろはをバ知らざりつるなおそと。其修理ふ預きる工の語りさまに。今おもへば高野寺ハ。あれより後ゑ建されバ。其時ゑいろはを作りて教へたりと云へる說と。うちひてぞ聞えゝる。さてかの仲雄王ゑ詩句ふ。字母弘三乘と云へる字母とハ。いろはにほへと云々ゑ四十七字ゑり。三乘ハ佛教ゑ。人に聲聞緣覺菩薩。と以ゑる三等ゑある事を云へり。こゝゑてハ人間といふ意なるべし。真言演四句と以ゑる真言とハ。龍樹釋論ふ。謂之秘密号。まゝと大日經疏ふ。梵云漫怛羅。則是真語如語不妄不異之音也。ゑど說ひ。まゝと陀羅尼神呪ゑど云ふものにも通をして称へるを。件の詩句ゑ。いろはすゑとち真言ふて。尊ゑ讃歌ゑる由の意に称へゑりとゑおゑ。梁高僧傳ふ。天竺方俗凡是歌詠法言皆称為唄。至於此土詠経則称為轉讀。歌讃則号為梵音。とも見えゝり。演四句とハ。涅槃經ふ。諸行無常。是生滅法。生滅々已。寂滅為樂。とある四句ゑ意を真言ふ演たる由を讃ゑるなり。ゑゑ此四句を演ゝる意ハ。上ゑも引出たる江談ゑ。假字法華經供養ゑ時の源信の說を舉て。日本國者誠雖為如来金言。唯以假字可奉書也。弘法大師傳ふ習諸真言梵字悉曇等密法之後。寄四教法文ゑ。（に四教法文とハかの涅槃經の四句をさしてゐへるゑり。）作イロハニホヘド讃給。以来一切法文云々。不離此讃文字。イロハ

ニホヘドノ字ハ句ヘドト云心也。と記せるをもて心得べし。さて又舊説いろはの讃歌なる詞に。彼ノ涅槃經の四句を當て解り。

色は艶へど。散ぬるを。諸行ハ無常之義。我世誰ぞ。常在らむ。是生滅法之義。有為の奥山。今日越えて。生滅滅已之義。浅き夢見し。酔もせず。寂滅為楽之義。

今按ふに此讃歌の句調。七言に起め。五言と句を互になして。五言に結め。八句四十七言なるハ。僧家に和讃とて唱ふ歌と。句調風體もはら同じ。然るハ佛經に梵讃とて。天竺なる歌のあるを。漢國にておのが國言をもて其句調に叶へ作りて。其意を演ぶるを漢讃といへり。さてその梵讃の中に。七言五言八句四十七言なる體のありて。其レに叶へて作れる漢讃なるをもて推し考ふるに。空海その句調なる梵讃漢讃のあるに擬ひて更に皇國言もて此讃を作りて和讃といへるを後に其句調風體によれる歌をうちはやせて和讃と称へる事となりよるものある事。對照して知るべし。この梵讃漢讃和讃の事ども。其證を挙て論へる説はま
ど。あゝにもつくしがたし。別に下にいふべし。かくて空海その梵讃なる四十七言なる體によりて。字母の四十七音を分りてその句調とし。いろなる四句なる法文

ゐ義をゝみ整へゝ一首と作し。又さらゐその假字を
製り定めて。已ゐ高野の寺建る時。工匠等ゐ教へゝる
を事はゞめゐゝ字知らぬ民ども。女童おどゐも口遊
ゐゝめ唱をしめて佛法の意をもほのゝゐ知らしめ
ゝ。其假字を書習をしめて。遂ゐ世ゐ行はるゝくも
のしたりゝるおもひゐねの深き事ゐ雲たぐゑ形き
所為ふこそハありけき然るに空海ゐ作れる天地麗
氣記と云書ゐハ。天兒屋命所持金剛寶杵中調色葉文
為浄事如元令成給伏乞矣。まゝ天御量柱天地開闢色
葉法身心王大曼荼羅。一心无作本妙藏天地和合

蓮華金剛无始无終從本垂跡也と云ふり。おを別ゐ又
色葉ゐ説を作りて。例の神道ゐも附會せるもの形り。
大和の當麻寺に藏る。空海ゐ真筆のいろはゐ首ゐ寶
字を大ゐひきはおちて篆體ゐ書たるも云をゆる天
兒屋命所持金剛寶杵中云々ゐ意を用て書ゝるなり
さゝ件の色葉文。色葉法身の説を。かゐ四教法文れ意
るものせるゐハ似もつゝぼ。拙劣しともゝゝ形しさ
るハ此色葉ゐ半めゐ。偽造れる強説形きぞ形り。僧文雄が
和字大觀抄の説ゐ。空海いろはぱ〳〵ゐ別ち讀まし。めて。はひふへほの詞を隱して。七字を
知らしめ。歌ゐ唱へていハ。はひふへほゐ形。わゐうゐおゐ事を
通ひゝ猴音と形る事を教へ。いゐをわゐをれ各二字

なりて其軽重の音に別ある事を知らしむるは。深妙の作なりと云へり。さて又此歌一首の上にぞ論をむねは。上の二句。いろはにほへど。ちりぬるをと。いへるは。花もみぢなど。云へる言なければ。何の色ににほへるにか。なにの散るにか。更にしあえがさし。其ぬかに意詞も。よくは調ひても。しあえざに。どかぞりなふも作り連ねむ事に。おぼろげの人に為し得べきにあらざれば。たやすく難むべきにはあらずかし。まづ釈日本紀に。假名之起當在何世哉と問へる答に。先師説漢字傳来我朝者。應神天皇御宇也。於和字者其起可在神代欤。云々。伊呂波者。弘法大師作之由。申傳欤。此者自昔傳来之和字作成伊呂波之起也と記せり。先師とハ此書に記者卜部兼方宿祢に師あるべし。日本紀私記を引ける中に。師説とてあるとを文體いさゝか後ざまなり。すべて此に云へる。いろは假字に説ハ。字原をさに讃へざる護説なり。さて此釈日本紀を問者たちの傳まさ與書によりて考るに。文永の末つかたより。正安のころまでに記せるものと見えたり。さて又皇國に雅歌ハ。五言に起めて七言に結むる例にていろは歌和讃などのごとく。七言に起りて五言に結めたる

ハ上古より一首もあることなし。然るに今様などいふ類の鄙歌に。和讃と同調あるハ。その和讃より轉りなるものなり。今の世にも。鄙歌ハおほかた七言に起りて五言に結むるかさまりごとくなるハ。その今様のたぐひに歌ぶりの。まさ漸に轉ひ来しものにして。いづれももとよりおのづからなる皇國に歌の句調には何らぼと知るべし。その論ひの調くにもしれあとぞ。別にいふべし。

◯かく考記しれたる後。此ごろ（天保十一年）高野寺に學靈法師に著せる。弘法大師年譜を見るに。此書なべての僧徒に作きるとハあよなくて。自他の古書どもを引て。懇切に記せり。或記云。弘仁十年六月一日。大塔心柱造始。南峯云々。同廿八日。心柱曳キ塔上時。大師令授與大工給印明。中畧 同其夕方此真言令忘失。仍實恵大工奉問之處。實恵。カナノツキヤウ

アヤシミ給テ。高祖御前詣奉問。下略 ゐゑ高野見問秘録曰。弘仁十年己亥六月朔日。大塔心柱造始南虎峰同廿八日曳之於檀上。杣大工一大法師二大法師。如此之役人等各十六人也。且云結縁料各々十六人授真言。同夕方此真言各々忘失了。仍實恵一大二大共奉問之所。實恵假名ノツキ様ヲ怪ミテ。高祖御前詣両明奉問。云云。と引載せ〻り。二書ともゐ同時ゐ事の傳説なるを。後ゐ関傳へきる僧ゐ二方ゐ書記せるもゐゐり。ともにむゐしゐ俗文ゐて。通えゞ〻ゐとあろあきど。相ゐよもゝ〻大意を推し考ふるに。

あの時大師ゐ大工等ゐ印明まゝ真言を授とゐへるハ。かの高野日記ゐ。空海高野山をゐりひらきて。堂を建る時。木ゐ道のゐくみゐ。いろはの字を教へゝる由ゝえきる時ゐ事ゐ當りて。うの倭片假字反切義解れ序ゐ。弘仁天長年中ゐ。造ル四十七字。伊呂波と云へる天長ゐ年ぢ。いろも合へり。其真言と云へるハ。仲雄王の詩ゐ字母弘三乗真言演四句と称へられゝるゐ相合ゐ〻いろはの事とゐ云ゝ。但し假名ノツキ様云々。と云へる詞ゐきこえゞ〻きを。つら〻〻考ふるに山槐記ゐ。今日訪三蔵院法印。次伊呂波と記さゐゝる次と同語ゝ〻。假名のよゝ次

様といふこゝなるべし。其を次といふ所る由を。空海
ゝ書る伊呂波假字の摹本どもを見るゝ。尋常のお
とゝ。七字六行。五字一行ゝ書終きるをれもゝゝ。大
工どもゝも。其定ゝいろはを書て。歌ひざまをも教
授きりつるを。大工忘れそきバ。さらに實恵ゝ問
ゝるゝ。實恵そゝ假字をゞ。ひろゝ讀まとよゝきる
ゝきど。歌詞なりとハ意ゝゝゞ。何事とも弓み辨へ
ゞゝを怪そて。そゝ讀次ざまを師ゝ問きる由ゝ
るゝし。そゝ真言もゝ梵漢などゝあらむまハ。實恵
ほどの法師ゞ。さゞりりのゝ假名附を。師ゝ問

ふゞりゝ怪しむべきさまあらゞ。又上ゝ論へるおと
くそゝゝみ賤しゝ大工等ゞよむばりなる目や
すき假字のゝるゝくもあらざれバ。いゞきまして
も梵漢ゝ真言の文字ゝ。假字附して授きらむとハ
おもゝれず。さて又りの次伊呂波と記きたるを。
當時もゝべくハ今の世ゝおとく七字づゝ ゝよそ
きり来れる中ゝ。真言宗ゝくハ。讃歌ゝ唱ふる聲明
のゝりて其を唱ふるを伊呂波を次ぐといゝて。法
文の義ゝ叶へて教ふるゝらひゝりるを其を授
りゝ法印ゞ許まものしめへる由ゝるゝし。さてか

く考ふるハ。かの引くる二書ニも文とも云ふ。云々奉問
といふまでを引載せて。其下文を畧々るハ。答言を
ゞ記さで。他事ふかよゞ屬るゞ故ニ畧るよう。又かの麗
氣記ニ。天兒屋命の。金剛寶杵の色葉文。おゝと天御量
柱ハ。色葉法麥。法身心王の大曼荼羅。曼荼羅すなわちは真言なり既ふい
へるおゝ。とし。ニ畧ど。ゝ畧る類ニ説なるゝく推考て。かくゝ
論らへる畧り。さ然ど。ゝ畧おゝ。其本書を見ざ是バ。れ
したて、ハ。ゝ畧ゞゝさゝ然ど。さゝがふすてがゝく
て。追継てゝ。に書加へゝ。なお本書をゝて言ひる
ばし。

かくて世ふ空海ニ書くるいろは假字ニ寫畧りと云
へるものあ然れ。ゝ畧り。今の世ふ普く世ふ行なるゝ
と。字體いゝく異あらぬゞ。いづきもたゞ寫傳へとる
のみゝて。其もとニ真蹟の在所を詳ニ畧らば。其中ふ大
和國當麻寺ふ蔵りと。ゝ畧へると。出雲國神門郡塩屋の
神門寺ふ蔵りといへるぞ。並ふ同ゝ字體ふて。正ゝ記
もの畧るばき。さて。其當麻寺なるハ。空海ニ朱印を捺
ぎり。前ふ篆體ふて。寶字を大きく書とり。古の絹ふ書
字ニ事ハ。上ふ天地麗氣記を引て論ふき。
てありとぞ。又神門寺畧る書の事も。高野山青巖寺經
庫刻本の野山名霊集ふ。かの頭阿の高野日記ニいろ

はの談を挙て。大師真筆ゝ以呂波ゝ。今雲州の神門寺
ゝ在て霊寶とし。同真筆の片假字ハ。當山の講坊ゝ在
て秘蔵す。といへるゝもゝ形ゝて。ゝおゆきバ。出雲人
ふたよりて尋称あゝせゝるゝ。おの事さゝゝゝ由ゝり
て。其所ゝ宰(ツカサ)どちたる人の。寺僧ゝ質問(タヾレトヒ)ゝるゝ。いま其
真筆ハゝふれ失せて。そを臨摹(ウツ)せりといふ古き楷(スリ)ゝ
た木のみ蔵傳(モチツタ)へゝりと答へゝりゝと慥(サダカ)ゝきけりと
云へり。然れバその神門寺なりゝも。真(マコト)ゝ空海の書る
ふてゝなりゝ。かくて今その摹(ウツシ)本どもを見るゝ
並(トモ)ゝ尋常(ヨノツネ)のおとく。いろはにほへと云々の字體を七

字ゝ形ちがきゝ六行ゝ書ゝ。ゝひもせゝゝ五字
をその次ゝ行ゝ書止(トヾ)ゝて。さて京字ハ無くて。別ゝ数
の字ゝ一より十まゝくを一行ゝ。百千万億ゝ四字を次
ゝ行ゝ。行體ゝ書り。おもふゝ空海おの假字を書さゝゝ
ゝて。いつも人の手本ゝ。然書きて与へけるゝ倣ひ
て上ゝ弘法大師年譜に引ゝる記ゝ。假名の次(キ)様と云へるところゝ論へる趣をも。おゝゝゝ考合すべし。今
ゝ世ゝもれよびおゝゝ其を児童おどのひろひゝみゝ。
一ゝゝりづゝよみゝるおとの如く形りきゝゝりて。つ
ひゝ歌のおとくゝもあらぬよゝざまとも形りしも
の形る法し。かく記しおゝる後ゝ。神門寺の縁起を見
るゝ。弘法大師おの寺ゝ兼詣して。伊呂波

を作きりと云ひ。又下文よハ。其時大社大明神和字四十八字を作りたまふりともいひて。京字のあるいハ説を。仏教ハ意も。説へる趣。又その書しざまもいハと拙くて。すべて寝言ハどをきくがおとし。おもいきと近き世ふ。えせ法師ゞ作れる妄説ハるおと著く。論ふおも。きらぬものあがら。さくぐよハ見すぐしがさくて書そへり。さくまくと世ふ伏見天皇の宸筆。まくと尊圓法親王ハ。ハりとて。いろハは假字を摹しるも。もを諸ら空海の書ると同じ體ふ見ゆ。但し是ハ真のハりや諸あらば。すくと倭片假字反切義解の末ふ。追考とて載られさるいろハは假字も全く同し。かくて古人の筆跡を監定むる人ふ。草假字書さるもの〳〵。今世ふ遺在るゞ中に。孰ゝ古紀と問あもはるに。紀貫之朝臣此ぬし。義和二年空海滅後卅三年ふ當れる貞観十年ふ生。天慶九年ふ卒。七十九。のよりぞ。おきまくと世ふ々遺り傳れ貫とい貫り。今その貫之朝臣のを始ふて。次々にき

あゆる小野道風朝臣。寛平年中生。康保年中卒。七十餘。藤原佐理卿。天慶七年生。長徳四年卒。五十五。藤原行成卿。天禄三年生。万壽四年薨。五十六。の真跡ハりと云へるものを見るふ。おのゝくさくハ草假字に。彼いろは假字の字體をもとまくふうるもしく書交へられきるおもむ紀を見るふも。いとはやくより書なききさりとむ古體ふるゞき事推はゝりつゞ。かくて空海ハ書定ゑくるいろは假字を今ゑぐらくかの二寺ハる摹本の字體ふもとゞき揭て。下に其原字を考注。又そハ同字の異體ふるを。件の四人の真筆ハ中ふて見及ゑくさるかぎりを合せ載ゑ。見合

せくおもひやるべし。但しあく又はその真蹟形筆法
筆勢形どまもかくはらば。もちら字體をわざやゝに
寫せり。但し漢籍に寫し載たるいろは假字の中には、
是と異形る字交れり。其も下にまさ寫し出し
て論ふ
べし

(い) 以之草 いいいい (ろ) 呂之草変 ろろろろ
ろろ (は) 波之草変 はは (に) 仁之草変 に (ほ) 保之草変 ほ
ほ (へ) 片假字へ之草 へへへへへへへ (と) 址之
止之省草取訓 とと (ち) 知之草変 ちちちちち
(り) 片假字リ之草 りりり (ぬ) 奴之草 (る) 留之草変

るる (を) 遠之草変 をををををを
(わ) 和之草変 わわ (か) 加之草 か (よ) 与之草変 よ (た)
太之草変 (れ) 礼之草変 れれれれれれ (そ)
曽之草変 そそそ (つ) 片假字ツ之草変 つつつつ
(ね) 祢之草変 ねねねねね (な) 奈之草変 ななな
なな (ら) 良之草変 らららら (む) 武之草 むむ
(う) 宇之草変 于、于 欤 うううう (ゐ) 為之草 ゐ (の)
乃之草変 の (お) 於之草変 おお (く) 久之草変 くく (や) 也之

草変 や や ま 末之草変 お お け 計之草変 ゆ ふ

不之草 そ ふ ほ ほ こ 已之草変 こ こ え 江之草 て

天之草変 て あ 安之草変 あ め あ さ 左之草変 き を き

き ち き 幾之草変 き き さ ゆ 由之草変 ゆ ゆ め

女之草 み 美之草変 み み み 美 美 し 之之草変

え え え え 恵之草変 え え え え ひ 比之

草変 も 毛之草 も も を を と れ め り も れ れ

れ れ せ 世之草 せ せ き き す 寸之草変 す す

右いろは假字の中へりつた片假字をとれるも孔あ
る。片假字の事ハ下巻ふ論ふべし。さて釋日本紀ふ問假字誰人所作
答師説大蔵省御書中有肥人之字六七枚許先帝於御
書所令寫其字皆用假字其字不明或乃川等之字明見
之若以之為始欤と云ふる事あり。若以之為始欤とハ師説ふハあらば記
者の文とおもえさおもはるべし。論ふ世らば
べくハ世ふさをまて讀ゞと孔中ふのつ等れ字ハ
明ふ見えさる由ふるぼ〻。然るをのつとも書ずして
の釈孔地の文の真字書孔ふ乃川と真字ふゞ作るハ古
まゝと原本ふハのつと書さりゝるふとり合せて書ふるゝ
と尋常の草體孔りと意得て真字ふ作るゝ後ふ寫す人のふ
べし。いづまゝも乃川と真字ふ書て在し由ふハあら

ば。さて件の師説ふ。先帝於御書所令寫其字といへる先帝とハ。あの釈紀記者の師の言なり。たほよそ記者のあの釈紀せる頃より。其師とおりゝ人の世ざろりまぢ。推し上せて。志ぢらく二十年餘りとさゝ考て考れば。その師れ言ふ先帝と称せるハ。順徳天皇。後堀河天皇などゑもや當りぬふぢき。さて肥人とは。肥の國人ぢるぢし。古書どもふ據りて考ふるふ。今ぢ肥後國を。古て火國といへりゝを。後ふ肥前肥後の二國とし。又後に改て。舊ぢ火國の地を肥後とし。筑紫ぢ今の筑前筑後ゑゝに接々る地を割て。更に肥前國と定ゑらきたりと聞ゆれむ。此説ハ。古事記ふ筑紫嶋を有二面四一と見えゝるゑ。日本書紀。肥前肥後の風土記を考合て。別ふ委しく云へり。前後の國出来て後も。ぢふ昔た。肥後を省ぐに肥國省も呼ひ。其國人を肥

人とも呼へゑしふゝ。續紀文武天皇四年六月の下に。薩末人ムム従肥人等持兵云々。と記さ物ゑる是なるべし。豊國吉備筑紫越の國々を前後ゑ割たれし後も。ぢふ其舊名をも呼ひ。吉備人筑紫人越人ぢど云へる事古書どもふ見えゝり。かくていろは假字世ふ弘まり。遠國の下ざはふも漸行き渡そむる頃。肥の國人のいまゞ能も書熟れざりけるゞ。調物ぢど進る時ふうひ〳〵しくかきて出せる書の。をゝしく省づらしゝりゝ物バ。國司よりとゑ副ゝ奉れるを。大蔵省ふ収置けるゞ在しぢるぢし。近き年おろ。蝦夷人ふいろはを習ひし省て。その書たるを見るゑ。いとあらぬさまに書ぢしゝゑるゞ。かへりてハをゝし。ぢ方ふも見えたりと。さたゑ松前へ渡ゑゝ帰りさる人のかさりき肥

人の書をおもゝ合せられて形む。松下見林の書せるもの〳〵中に。今西國人文字の異體ふ書形し〳〵きるを見て。肥後字ふ書たりと云ふと以ゑり。古諺形遺きるふる法〳〵。本朝書籍目録帝紀部ふ。肥人書五巻。薩人書と並べ載せり。肥人書五巻とハ。かの有肥人之字六七枚許と云へる書ふて。綴書ふたゆらで。其書さるもの〳〵五つまれふ〳〵さるを云ひ。薩人書とゆるハ。薩摩人形書ふて。類形書形り〳〵形るぶし。さて薩摩ハ。漁獵を專とれる佐都人ふ因きる地名とれ。あゆる由。鈴屋翁形古事記傳ふくは〳〵く説ちれ光るゞおとく形るべけれむ。ゥ〳〵ハ其國人を薩人とも云ひ〳〵ふる法〳〵。ふと其國人を隼人とも云ひて。やゞて其國を隼人國と云へり〳〵ふも思ひ合すべ〳〵。かくてその肥人薩人の書を。ふ形書籍目録の帝紀部ふ載さるむ心得ゞ〳〵。此ふ混もと次形る公事の部ふ在けるゞ。傳寫せるとれふ。れさるものふる法〳〵。さらバ上ふ云へる云々れいむとりきふて。共ふ大蔵省ふ在ゝるゝら。公事部ふハ載とり

ゐ　無之鼻音。无之草変。片假字作九○鴨長明が抄ふ。古人云。假字にものかく事を云々。むね書ふくき形どをバ。み形きゝ〳〵かくなり。万葉ふむ新羅をむ志らとかゝり。古今の序ふむ喜撰をバきせとかく。是らゝ形其證形り。と云へり。ち絲さるもゞとむ。此ん字をいへる言ふり。顕昭の古今集注。物名形中のくたゐといふ由の説ふ。「ント云フ文字ハ無キヲ。ヒトヘニ。ニトカナヲツケムモサスガニアシケレバ。外書ニハ。ハヌルトキニハ。ント書ハベルナリ。同ジニ。モジナレドモ。シモノテムヲハ子テカクナリ。おゝさ同人の袖中抄ふ。縁の字音れ論ふ。えにとハえんと云詞形り。すゑむねたる文字ハ。以川きも假字をバふとつゞくるふ。ち絲さるゝ形の文字なれ故形り。あどいへり。おれふよれバ。草假字のにをんと書き。片假字のニをンとかくも。ともふ下モの點をむ祢ちる形り。然るふ上ふ挙きるおとく。無をもんと書さるハ。もとハ仁より出きる書ざま形ゞら。無を鼻音ふ唱ふるかゝふも用ひ。又正〳〵く無といふふも轉〳〵かよむ〳〵て用ひさる

ものなるべし。形の片假字のンの下ふ記せる説をも考合をべし。

○疊字例

ゝ　一字之疊

ゝ　二字之疊　こよゝ

ゝ　三字之疊　せと

「のゝみをゝまてはやゝ〳〵きるをみて」　六字之疊

形のゆゝりつゝ松ぼゝ波どゝうゝ〳〵おとせるもありぬ。ぢく。もとよりおの巻ゝ見れよばざるゝゝ多ゝ添べゝれど。准らへゝ松〳〵をかるぢし。形のかの四人ゝ引ぬ〳〵ゝちれ真蹟形りとゝへゝる中より。歌ゝと刈づゝぬき出〳〵て。れのよそに臨寫〳〵て。その手れ風をゆゝらを

ゝ。

貫之朝臣

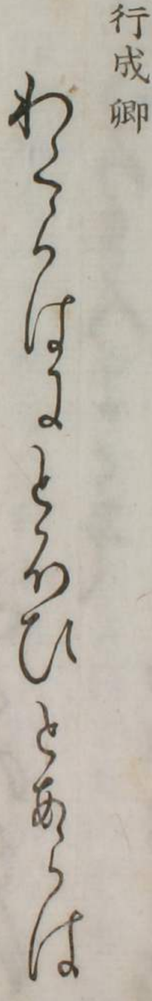
はるゝふのゝやゝこうはゝね
きゝのゝゝれ
いゝとゝゝよゝゝゝ
うゝゝゝゝゝれ

道風朝臣

しゝのゝれゝとゝゝゝ
ゝゝゝゝゝのゝゝゝゝれ

佐理卿

行成卿



かく形おきし。遠江國巖室山牛鼻と云ふ巖嶋ふ空海の詠て書りと云ひ傳ふる歌の碑ゑ彫るゞ在りとて其撮寫たるを見るゐ世をうし乃も
ゐ見車にはのみち。ひゝれてゝ〳〵ゐ思りきゐゐりゝと
書り手のすぢといを歌の體といひ。さらに空海の書
形らむとハ思をれざりつるゞ。後ゐ其國人のいふ此
碑ハ以と遠ゐらぬゐろ或ゑせ人の造りて建さる又
もの形り。といへり。まだらをうしけれバ書きそへつ。又
土佐日記一本形跋ふ。土左日記。以貫之自筆本故將軍御物希
世之重寶也。今度密々自依或人數奇深切所望書之古
小河幕府申出遂一覽。
代之假字猶蝌蚪末愚臨寫有魯魚乎。後見輩察之而已。
明應壬子仲秋候。亞槐藤原。と記されたる事見えゝり。
今按るふ。古代之假字猶蝌蚪とも。後世の形べくれ手
の風とも異ざま形るゞ故ふ。いと讀ゞとかりゝ由を

おとこもすなる文(コトバ)なりけり。漢國にて蝌蚪と稱へる古字の體に似たりとなれど非ず。又有魯魚亥豕とて字體の相似たるをよみ誤りて寫したるがゆゑなりとなり。かゝる日記は。殊にいさゝかもいつはりなき事無く。はしたなく書ふものせられたるなるべし。上ふうゐしに載たるがおとこもはしたなく書ゐる手の風を見ても。おもひやらるゝなり。さて彼ぬしの世ざまりおとなしく延喜の頃は。空海の滅(ミカ)りさる兼和れおろよとなづけに七十年ばかりゝ後なるふいさかもうひ〳〵しげなく。然むかしふものせられさるゝそのふみを思ひやるふも。いとはやくより歌など書ふた。草假字をもて書くゝらひなりゝるふ。いろは假字の又さらふ便よりふ習ひて。殊ふなるさらに書く習となりたるなり。世ふれむなるなるし。さらばそたとひ已獨はよゝく書得たりとも。人の見るをも心きべきわざなるをや。さて然書く假字を草假字といふもと假字を草に書ふるなり。なほ假字も草ふ見えるは。枕草紙ふ。人はさうぶかなるる草帝とおいで〳〵御らむず。誰ゞふゝらむ。かきふ見せさせふへ。それぞ世ふなる人の手は見知て侍らむと云々。と云ふるあれふり。顯昭なる古今集序注なる跋ふ。或說。貫之之草假字序(ハ)詣(テ)紀淑望(ニ)令(メ)書眞名序(ニ)云云。とも記せり。

形わある歟し。正〳〵くハ草假字と云ふ歟きかりさき
どはやくよりつねふをたゞこのおとのゐ云ひあれる
ゐ。宇津保物語菊宴巻ふ神樂の舞人を催をとあろの
文ふ。免ぐらし〳〵て。おくにさうがかきつけく
つろはさぐ。すまをじとあるも。草假字の事形如くれ
あゆれど。さくを文義きあゑゞときを。一本ふさうの
形のれつけてとあるハ。草名を書てといへるゐて。其
意とほりてれあゆれぐ。さうがかと書る本ハ誤ふり。
いさ〳〵ら混を〳〵ゝきバゐきまへは。さて又
平假字といゐる事。古くをれおゑぬ称形ゐ。西宮記ふ。
元慶六年日本紀竟宴歌の事を。以假名字書詠句。とゆ
るを真假字形きと。他の漢文形るゞ故ふ然を云へる
形り。すべく漢文真字書等形中ふゆらむをバ。歌ふま
れ辞ふま形。たゞに假字と云ふ歟れあとゐり形ゐ。さ

て歌をれきく假字もて文ふ書とゝのふるハ以ゆの
ほどよりれ事形りゐむ。古今集ふ。小町ゞ妙形歌の詞
書に。ゆひ忘れりける人形。やうやくあれゞふおり
ゐるあゆざふ。焼けゝる茅の葉ふふゐをさゝてつろ
はせりゐる。と有ゐ。小町を小野小町形り。その小町ゞ
世のほどハ。遍昭僧正集に。嘉祥四年長谷寺ふく小町
と歌ゐみかたゝ〳〵あと見えく。小町ゞ世ざかりのあ
ろとれあえゝり。そきゞ妙の世ざゐりを推量るふ。空海
ゞ卒れる頃ふく。おほうゝ仁明天皇の御世形頃ふゐゝ形る
歟〳〵。ゆをゆる茅形葉ふさゝ〳〵るふをハ假字ぶみふ

て。其中に書たりける歌をとりて載られぎりとき
ゆ。然きバそのゝみすでに仮まねく假字ぶゝ書く世
ゝ。寛平ゝ菊合。后宮歌合などゝ。ゝ假字の文ゝ
ゝ。其後貫之朝臣ゝ。昌泰元年大井川行幸ゝ時奉きる
歌ゝ序。延喜五年の古今和歌集の序。や〳〵その後ゝ書
りと聞ゆる伊勢ゝ日記。此日記伊勢家集の始ゝ収きる
日記とゝも云へる事ハ。おのゝ其文を別ゝ
ものゝ〳〵。表章伊勢日記といふ書ゝ注へり。羕平五年
ゝ頃記せる貫之ぬゝの土佐日記あり。ゝ〳〵中納言藤
原兼輔卿ゝ作ゝ物語あり。ゝをゆる堤中納言物語あり。此卿羕平

三年。五十七ゝ
ゝ。そゝ物語のゝ。おもしぬ方ゝとまりする
少将の巻ゝ。むゝ〳〵物語ゝ。ゝどゝぞかやゝ此事はきゝ
ゝるを云々。ゝゝ。ゝとに物語ゝ。ゝきつけたるゝりさま
ゝとゝるまゝ〳〵く云々。又少将殿ゝりとて御ふみあり云
云。又虫ゝづる姫君ゝ巻ゝ。姫君ゝ事を。假字ハゝゞ書
ゝゝざりゝきバ。假字とハ草かゝゝんゝゝて云々。と
假字ゝり。
ゝる物どをおもふゝも。其かゝみゝやくゝりゝまねく
草假字を書ゝ。又物語文の世ゝ多ゝゝゝ趣ゝるを。此
かき考合せて。假字文書熟きりける世ゝ久〳〵さ。おし
ゝゝるゝし。さて又伊勢物語ハ。藤原範兼卿の和歌童

蒙抄ふ。業平が手づからかみ屋帝ふ書るる伊勢物語
ゐ。朱雀院ゐ塗籠ふ仕りけるよを云々。と見え。真名本ハ後人
の書ゐせるものゐるあと。鈴屋翁の委く辨へら
れ〻る説仕りて。玉がつまに載らまきるが如し。古今
集ふ。此物語をとりて載らまきりと見ゆる事。其歌ゐ
詞書にくも知られ〻り。其も集中ゐべての例ふ似ず。詞書のいとばらあるむりり
長くて。皆あの物語ふ見えるる矢ふ。お
ほうと異ゐらざるをもおもふば。業平朝臣を元
慶四年ふ卒ゐひきれむ。其近き世ふ記されたるもの
とせむよも。古今集撰ばきる頃より二十年餘り前
つ〻に書ゐへふよ當れり。此物語も。業平朝臣おも
有しあともあらおしおとふ。ろありて。わざと
書ゐるし。今むの涯ゐ歌をさへふ作りて。書載ゐへる自

書ゐるを。後ふ他人ゐ書加へきる文ゐ交きるものゐるば。此説別ふ考記せるものあり。かきあれ
考れもふに女ゐふみを草假字もてゐ紀。おと一部の
書ふ書ゐすばりにゐ至たるも。嵯峨天皇ゐ御世。空
海がみさのりゐ至ける頃。すでふ去りゐりりむ。さる
習むありけるにあもせて。空海が意匠もて。草假字を
又さらに省して。ゐ〻ざらふ書出し きる。いろは假字
の便よ紀がうへふ。性靈集ふ載きる空海の奉獻筆表ゐ
草藁之別。臨寫殊規。大小非一。對物隨事。其體衆多云々。
撥管云々。謂五指共撥其管末吊筆。急疾無體之書。或起草
藁草用之と云へり。藁とハ草をまと省せる體をいへ
るるく。ふもある起藁草用之と云へる由の名称ゐる
ばし。そゐ藁の體のををおよ
ぼせるものゐるばし。まと勅賜屏風書了即獻表の中

る古人筆論云。書散也。非但以結畧為能。必須遊心境物散逸懐抱。恥法四時象形万類。以此為妙矣。是故蒼公風心擬鳥跡而揮翰。王少意氣想龍凡而染筆。蛇字起唐綜典書發秋婦軒聖雲氣之興。勢仙風悲之感。垂露懸針之體。鶴頭偃波之形。騏驎鳳凰之名。瑞草芝英之相。如是六十餘體者。並皆人心感物而作也。或曰云々。又作詩者。以學古體為妙。不以寫古詩為能。書亦以擬古意為善。不以似古跡為巧。所以振古能書。百家體別。云々。空海儻遇解書先生。粗聞口訣云々。まゝ獻梵字并雑文表文の中ゟ。結縄廃而三墳燦爛刻木寢而五典聳興。明皇因之而弘。風揚化蒼生仰之而知往察来。不出戸庭万里對目。ゟ因聖智三才窮數。誓古温故。自我垂範非書而何矣。云々。文字之義用大哉遠哉。云々。と云へる事も見ゆ。そゝのみかゝる見識の意匠をもや用むとゝりゝむ。

ほとけといふらむもの〳〵おとく。たほやけざまをもゝ〳〵ゝて。世ゝ人にあゞ〳〵られ。まゝ前の世ゝも比ゝ知手書ゝて。草聖と称へらまゝゝる空海の。佛法ゝ意をさへ

ふとりて歌ゝ作りとゝ。ゝれへ書るをいとゝゝ多かゝとく。ゝゝではやせるまゝゝゝ。たのぼゝら假字書の楷模ゝ如く形りて。もとよりれ草假字も。其體ゝ准據て。まゝまゝす省〳〵て形ゝら〳〵書く事ゝ。漸ゝゝまねくゝりつゝゞ故ゝ。後世ゝれよびてゝ。空海のいろは假字をもて。草假字ゝ始のゝとくく云傳ふるゝとわざと形りぬるものゝるゝし。貝原好古ゞ字體の原始を諸書を參考へる説の中に秦の末世ゝ乱ゝ諸國驛馬を走せ。羽檄相傳ふるゝ篆隷ゝ書赴急の用ゝ堪へゞ〳〵て。行草の書體興る。漢の世ゝり〳〵行きく。後漢の張白英ゝ至て其法備ハまりときゝゆる由いへり。ゝゝゝゝゝ皇國の草假字を准ふゞきまハゝらねど。漢字を假字ゝ用ひゝ熟るゝゝゝ合せて。おのづゝら草體ゝも書ゝ〳〵なりぬるゝ。空海ゝろ〳〵〳〵ていろは

を製ゐてより。漸そまゐ效ひて。遂ふ一種の草假字ハ
いで紀ゑるをおもへば。空海ハおのづからかの張白
英と相似ゑる趣ゆ さてまゝと三密房ゞ大師傳とゝふ
りともいふばし。
書に。嵯峨天皇より空海の賜はりたる御製詩を載て
深山居住振奇名。氷玉顔容心轉清。世上草書言為聖。天
縱不謝張伯英。暫乘雲嶺一念隙。書得綾羅四帖屏。初見
筆精鸞鳳體。清看墨妙虬龍形。中畧絶妙藝能不可測。二王
没後此僧生。既知風骨無人擬。收置秘府最開情。と見え
ゐり。御手いと善くあそばしゝうと申傳へ奉れる。此
天皇すら然ぞうり讃美させ給ひゝうゑ紀ゆゝと續日
本後紀ゐ。兼和二年三月丙寅。大僧都傳燈大法師位空

海終于紀伊國禪居。庚午勅遣内舍人一人。吊法師喪。並
施喪料。云々法師者讃岐國多度郡人。俗姓佐伯云々。在
於書法最得其妙。與張芝齊名。見称草聖。年卅一得度。延
暦廿三年入唐留學。遇青龍寺恵果和尚。禀學真言。其宗
旨義味莫不該通。遂懐法寶帰来本朝。啓秘密之門。弘大
日之化。天長元年任少僧都。七年轉大僧都。自有終焉之
志。隱居紀伊國金剛山寺。化去之時年六十三。と載され
ゝり。空海の死去れる兼和二年より。おの紀を撰び終
て奉られたる貞觀十一年まで。三十四年を歴ゐり。空
海始て草假字を製ゐて。世ゐ用ふる事とあり。ゝらむ

また。件の傳ふ其功をも記さるばきに。書法の妙を得たる事と。草聖と称へる由をばみ舉載されさるをば。やく草假字ばかりく世ふ行ちきたるゝ故ふいろは假字作きる事ハ。ゞり弘ても舉られざりりるばるばし。志のるに性靈集ふ。僧觀賢ゞ空海ゞ諡號を請表云。兼究臨池之妙。緇素皆成倚頼。倭漢推為楷摸。とへる。（あの上表れ時ハ。弘法大師畧頌の阿闍梨道範注ふ。延喜二十一年十月二十七日と云ゞる）件ばる文ふ倭漢と云へるを。倭字漢字の義ふく。倭字とは當時ばる草假字をさゝて云ゞる事ばゞら。吾妻鏡ばる建久貞永等の頃ば文ふ。草假字ばる事を和字と書けるも。そのゝみをやくよりれ称なるゝばるばし。又文永三年仙覺律師ばる万葉集の跋ふ。倩案事情。天暦御宇源順等奉勅奉和之刻。（あの和とハ讀さまの事）ばる定於漢字之傍（漢字とハ。本書の歌の漢字を付るをいへり。下ばるも同じ。）名歌。（あの假名とハ片假字あり。下ふいゞるも同じ。）愚本於漢字之右付假名畢。是則其徳非一。其徳者一者料紙三分之一書寫惟安。二者和漢（和とハ和字の謂ふ。）字の事をいひ。漢とハ本書の歌ばる漢字なる故ハへるばり。下ふ書の歌ばる漢字なるも同じ。）て。ふゝ。ふくハ草假漢別時短歌猶以校勘有煩。何況於長歌乎。三者若和若漢訛謬無隱云々。或本の仙覺生年四十五と称て書る

跋ふは。抑万葉集、和字出来之後者。和字とハ草假字ゟ出来之後とも。草假字を普く世ゟ用ふる世と
ありてといふ意とたゝゆ。漢字歌一首書了。又更書
假名、歌事ゟの假字とハ、草假字をいふる ゟ常習也。是者不知漢字男
女等為令見安歌。とも記せり。草假字ゟまき。片假字ゟ
まれ。なを〻ゟ漢字ゟ對へて。和字ともいふゟき ゟ
ゟ。觀賢ゟ表文ゟ。緇素成倚頼倭漢推為楷模とゟ
も。空海をもて。真字ゟも草假字ゟも。世人の楷模と為
とゟ ゟる ゟり。空海をもて。漢國ゟて書の楷模とすべ
考合せて知ゟ ゟ。因ゟ云。上ゟ引きる仙覺ゟ万葉集
云。天暦、御字。源、順奉勅宣令付假名於漢字之傍畢。然又
法性寺、入道殿下。道長公為令献上東門院。仰藤原家經、

朝臣被書寫万葉集之時。假字、歌、別令書之畢。爾来普天
移之云々。然而道風、手跡本假名、歌、別書之。古老之説有
相違歟。後賢勘之。と云へり。今推考るゟ。順ぬゟれ歌の
字の右傍ゟ片假字を附られ ゟる由ハ。上文ゟも見え
たり。かくて家經ぬゟれ。歌ゟ左方ゟ別ゟ草假字ゟて
書そへらきゝる由とたゝゆ。女院ゟ献らる〻ゟハ草
假字ぞ似つゝゟ前ゟ仙覺かゟ
家經ぬゟ世ゟ。道風ぬゟの然書きゝる本ゟ
ゟれむ。家經ぬゟゟもの せらきつるより。普天移之と
云へる古説を疑へるを偏ゟ。道長公の家經ぬゟゟ
書せて女院ゟ献ゟめゟゟゟ。別ゟ草假字ゟて
歌を書添る事の。ゟねくゟ世の例れ如く ゟり ゟる ゟ
るゟ。かくていまも古人ゟ人の書る万葉集の鈌 ゟる ゟ
一ひらニゟらと遺きるゟ。然書けるゟあれか
ゟ見えゝとり肥後國熊本、本妙寺ゟ蔵る。宗尊親王の御
手ゟりとて。世ゟも摸ゟ傳ふる日本紀竟宴、歌も。然書
きゝまゟ。かくていろは假字を。手習ふ人のはゟ免とゟ
る ゟらひも。延喜ゟ頃ゟりゟ。はるゟに後の事 ゟる ゟ

し。そハ古今集序に。難波津の歌ハ。帝のおほむはじめなり。浅香山のことのはは。釆女がたはぶれよりよみて。此ふたうたは。歌の父母のやうにてぞ。手習ふ人のはじめにもしける。といへり。難波津ハ男の歌・浅香山は女が歌にて。ともに忠心をのべたるめでたき歌なれバ。歌の父母のやうなりと。さだめいひたる説のはりなるによりぞ。やがて手習の始にも書く例となりたる由なるべし。源氏物語若紫巻に。紫上がをさなきときが事に。まだ難波津をだに。はか〳〵しうつゞけはべらざめれバ。かひなくなむ。といひ。草假字ハ。難波津の歌をだにちなち書なして。書つゞくる事ハえせぬほどなれば。ふみなど書く事ハえせざるよしなり。下文に源氏のかの御はなちがきなん見なへまほしき。とのたまへるをもても知るべし。此物語ハ。長保の末より寛弘のはじめが頃までに作りたるものなるべき由。安藤為章が。紫女七論の中に論へるさる事なり。枕草紙に。御硯とりおろして。とく〳〵。すぶれもひまたえさて。難波津なりても。ふとおぼえむことを。とせめ給ふ。此草紙書る清少納言も。紫式部と同じ世に在し人なり。などあるをおもふべし。但し上に引ける如く。堤中納言物語の。虫めづる姫君が巻は。假字はまだ書給はざりければ。かたかんなにて云々。とある。その下文に同じ姫君が事にかけて。白き扇に墨ぐろに。まなの手ならひしたるを。さしいでて云々。とあるを思へば。そがろみ大かた手習のはじめには。まづ片假字をかき。此片假字書く由ハ。下巻に論ふべし。つぎに

真字を一ゝとまものしてさて草假字ゐもうけりて書くゐらひゐで。かゐ難波津淺香山ハそゐ草假字をはじゑてゐらふと知ゐ。かくゑゑしゐりしゐるゐし。此手習ゐ次第の事をそゐのみ世の中ゐとゝく然ゐりけむと。かゝくゐ定ゑるゐハあらぢ。古今集の序ゐ云へるも。堤中納言物語ゐ志るされ考るも。其ゐらみの大ゐゝとゐてぶりをもて云へるゐて。今ゐゝに論ふも。そのゐみの大方のさまをおしえかりて云ゐる。ゐり。古今集。栄雅。抄ゐ。難波津淺香山の此ゐゝ歌を。ゝの父母ゐやうゐて徳ゐる歌ゐ。手習ひそむる歌ゐてありと云ふ。むゐしれ能書の手本ゐ多くのける見也。昔ゑ手習ゑ始ゐ。いろはを習ふ事ゐ。し。さていゑ二歌をゐらひけるゐや。とも注さゐあり。いろは假字を手習ゐ始とせる事ゐ。ものゐ見えゝるゑ。江談抄ゐ。天仁二年八月云々。問曰。假字手本何時始起

乎。答云弘法大師御作云々。此全文ゑ上ゐ引考りゑ。とみえゝゐ。いろは歌の事をうちまろせて假字手本と云ゐるを思へむ。當時ゑやくより。ゐまねく兒童の手本ゐ始に書て與ふるゐらはしとゐゐしゐりゐ。台記ゐ。久安六年正月十二日。今日今麻呂參御前依勅書伊呂波と見えゝり。久安六年ハ。江談ゐ見えゝる天仁二年より。四十二年後ゐり。今麻呂ハ。記者字治左大臣藤原頼長公の三男。隆長公ゐ童名ゐ。又古今著聞集ゐ。二條院天皇ゐ御世の事ゐやとて云。いろはの連歌ゐりゐるゐ云々といひて。うゐじゐ。ゐ。ゐ。當時すてゐいろはゐじをゑけ考る句。と見えゝり。當時すてゐいろはゐ歌を。打まゐせゝ以呂波と云ふ事と。ゐ。ゐたりしと聞えゝり。但しいろは歌と云へる事。古書ども。ゐ見あゝらざれど。然いふぢきあとゝりゐ。徒然

草に。延政門院いときなくおはしましける時。院へま
ゐる人にことづてよとて申させたまひける御歌。ふた
つもじ（一本にかさねもじ）牛の角もじすぐなもじゆがみもじ
とぞ君はおぼゆる。こひしく思ひまゐらせたまふとの
ことゝいへり。御歌の意は。こいしくの字の様をもて隠
語になしたまへるなり。さてゆがみもじハ
直なるもじに對へて。曲みたる由にて。くの字なり。
ことゆの上のき字といへる説は。ころかるべし。延政門
院ハ。後嵯峨天皇の皇女。悦子と申奉れる御事にて。弘
長二年に誕生させたまへり。其幼くおはしましていろ
は假字習ひたまへるほどの時の御事なるべし。當時は
やくより。皇子たちも習ひたまへる御例なりけむ事・推

して知べし。吾妻鏡に。貞應三年四月廿八日。有若君御
手習始儀云々。御手本昨日自京都參着云
云。長生殿詩云々。とみゆ。古ハ祝賀の句を用ひたまへる
にて。古も今も尊き卑き人の心々にものすべきわざ
なりけり。かうやうにいへるハ。昔の大方
の例を推はかりて云へるなり。さて假字手本の終に。
京字を書けるは。かの空海の真跡と以てする本には無
し。上に引ける江談等の説にもきこえず。河海抄に。江
談の假字手
本の事の問答の次に。一說を擧て。伊呂波有三段。イロ
ハニホヘト。チリヌルヲ。大安寺護命僧正作。ワカヨタ
レソ。ヱヒモセス迄。弘法大師作。作京或說慈覺大師と
なり。伊呂波を護命弘法二人の作とせるハ謬傳なる
事。仲雄王の詩句にて明なり。京字を慈覺がなすとい
する傳もおぼつかなし。慈覺ハ貞觀六年に卒りし人
なり。かくて又汲門朝可が以呂波畧注にも。上二句を
護命。以下三句空海が作なりといひて。東寺所傳於是
止已以四十七字故。若依山門所傳者。加
京一字といへり。古きも同じ謬傳なり。頓阿の高野日

記ふ。いろはの四十八字といひ。歌ふも京字をよみさ
れぞ。そのあみすでに世ふ普く京字を書添る形らは
しと形ヲたりしものあヲろり。頭阿を。文中元年。八十四歳まで卒たる人形
り。さてその後形ものよを。上ふ引たるおとく。善成公形河海抄ふ京字の一説を注され。まこと實徳年中のい
ろは連歌形句の上ふいろはもしを句のかしらふ京
ろてよ色ある結句ふ花やうとよ色るをえこり。又新
韻集の序ふ借ニ于色葉七行四十八字之假字ヲ云々。と作
るも京字を加へて云へる形り。僧文雄が説ふいろは
のまこまて假字づくひのやう。大方ハ知ら考れど。
合字の法知ぎ。きが故ふ京の一字を置て。ぎやう
形三字を合せて。京の音とある。此例かぼて。よろげの合
字の法を口傳し教へ考る形ヲ形べくを尊ぶ義ある
文字の中ふ京字をとヲて示せる。京を。一二三より百
ぼし。又空海の真跡いろは七行の次ふ
千萬億の字を二行ふ書り。此ハ其數字をひとつふこ
つとよこて。其假字をも口傳せる形るぼし。と云へり。

但し空海の真跡とハ。かの當麻寺神門寺形るをいへ
るよく。其形らむよを。並ふ京字ハ無きを。以ておる真
跡をを形きて。京字の事をさどせるいくよぞや。さて草假字形事の古書ども
に見ゆこりたるを。以さこらぼみいで。古形さま我
考ふるくさをひとをべし。土佐日記の始ふをとこの
す形る日記といふものを。女もしてみむとてする形
ヲ。そのあみ草假字をもをら女文などふ用ふるおら
形し。ひおヲくれバ。此日記を。女の記せ形書の如くとり
旅のよまれ。日記を假字ふそのくを男ハ。尋常のよまれ
べし。おきより後のも形形ぼ。ふく書く例の無くりしおる
うの手よ。かんおヲとおろ。源氏物語須磨巻ふさ
日記よいあらぼ云々。とも
いへり。此文下よ引ぼし。 同書ふ。安倍仲麻呂朝臣唐
ふて。ゆをうヲ形ぞらふりさけうれぞの歌よみこる事

を以ゐるとあるを。かの國人聞おるまゞくおぼえ
ねど。事ぢ〳〵ろを。男もじにさまを書出してゝの
ゝ出でたゝへ出る人ゐ。以ひちらせられむ。心をやれ
き得たりけむ。以とおもゐ。ぢほゝゐ形むゐ。男も
ぢゐさまを書出して云々とい。歌の趣を。真字にて漢
文に書出して。皇國語を知れる譯者ぐちたるものゐ。
歌詞を云ひ知らせとる由形り。男もじとハ。草假字ハ
つれ女の用ゐそ書くものゐれむ。それゐ對へて。真字
を男字と以ゐる形り。又其意むえゐて。草假字を女手。
真字を男手とも以ゐり。其々下ゐ舉ぐばし。手とハ字
を書くゐとを云ふい。
ゐしへよりの詞ゐり。紫式部日記ゐ。清少納言ゐそ。ゐ
出りの回ゐいそじう侍りける。人さむかゐさゐ〳〵ど
ちゐ形かきちらして侍るほどもよく見れむ。ゐぐ以

出たへぬゐと多かゐ。かく人ゐゐと形らむと思ひゐ
の名る人ハ。ゐのゐらば見ゐとりし。行すゐうさてのゝ
侍れむ云々と云ゐて。さて式部が用意を以ゐる詞形
中ゐ。云々とやう〳〵人の以ふも聞と先て後いちと
云ふもじを世にかきゐとさし侍らば以とてづゐ
さまし〳〵く侍り。そのゐみ女ハ。もはら假字をのみ書く
真字ゐゐ。假字に對へて形べ形り。ゐ形とハ
源氏物語葵巻ゐ。源氏君形手習形反古のさまを以へ
る文ゐ。ゐれるゐるふるゐとどもゐからのもやまとの
もゐきけゐしつゝ。さうにもゐ形ゐも。さまゞ〳〵ゐめ
つらし形さまにかきまぜゐ形り。と云へるハ。草書に
も楷書ゐもといゐるゐり。さてゐと日記ゐ。いちとい
ふもじを世ゐ云々とを。一と以ふ字をゞに真字ゐは
書らぬと形り。書ゐ〳〵とハ。一の字ゐ書く筆ゐろひ

よりていまる文
にておもしろし。洞物語國禘巻〇此物語・天徳の頃
或人考へていまるり。ほひ作きる物おるばしと
さる事形るばし。お。女御殿君。かしあるきど。此御手
こそ右殿大將の御手おおぼえめへきど。藤つぼ殿たち
そのかたて奉られきる本をこそハ。手本形り。をとこ手も
女手も男手ハ真字・女手ハ假字形ま・志ろ 習ゑめふ先
云ふ由ち・上おいへるばおとし。
きそれ昔のぞとて。今のをめるおきど。おと奉られざ
先りしうば云々。むらしと云ひ・今といへるち・假字の
書ふり殿事形り・此古今殿論ひ・下お
引く源氏物語梅枝巻お見
えるる詞お考へ合ちべし。又同巻まかるほどお。右
大將殿よりとて。手本四くまん。いろ〳〵殿しに
書きて。花殿枝まつけて。そんまうの君殿もとお御文

してはり。みづからもておるる法きをお同せおと侍
し宮殿御手本もてまるるとそれん是も若宮の御きき
うにとのさまちせしかど。習ちせめひつぼくも侍ら
ねど。先し侍ましあだ形ん。以そだおるらるるときこ
えさせめへ云々。御ぜんまもてまるまり見めへど
黄だえる志殿しまあきて。山吹おつけるる志。志の
て。志のてち・真の手まて・俗おいふ萬葉
書お楷書おものせるよしときこも春の詩青き志
殿しお書て。松まつけきるはさうにて。此さうにてと
草書まる書志るよしあるばし。源氏物語推本巻まる・宇治
ハ宮の御歌・山風まる霞ふきとく聲ハあれど云々・草まる
いとをろしうかきめへり。とあるも同じ形おはり。ま
た圓融院扇合の詞まる扇をうにものい類まてちまて。

そをよ歌を書る趣をいふ詞なり。ゆしてなり云々。例の扇に歌かくやうに。ゆゑ織つけなり。云々まに形が形なりて織つけなり。尋常の草假字あらで。万葉書を草見えるまに形がゆゑ。尋常の草形どなるものしなる由形る

し。夏の詩。赤き志ゆしゑ書て。うの花をつけなるハかゆ。草假字形。はじ色をを。とこふてもゆらば。をんゆふ

てもあらば。ゆ色つち。諸本云とあらば。ゆ色つち。諸本云とあめつちそのつきを云

无しと注せる本ぞよき。其そいをしへあ色つちほし

そら云々。と四十七言の誦文ありしを。順朝臣集。源為

憲朝臣れ口遊。などにええるゆ色形。さてそのあ

めつちの誦文のをハ。おのを色別ふ考志るせるものゆら

り。さてゆをとこふてもゆらばとハ。真ふてもゆら

ば。草ゆてもあらばと云へるふて。行の體をい冥る詞

あり。又をんゆゆてもあらばとを。よ形常の形よびと冥

る草假字ゆてもあらばとい冥。ふてもゆらばとい冥

ゆ。字いひしらず。そのつぎふをとこ手。は形ちがきふ

ゆ。もしろし。

この形て。同しもじをさ濁ぐにのへてかゆ形ゆ。すをかをりてや見えむ

て春ゆつさふる水ぐ形も。

とゆらん。此條の歌ども。ちゆへよは物語のおもむき形情を形べてをうへ

趣を形しちりときこゆ。かくて男手れ形ち書ふ云々

とは。真假字ゆて同じ音形假字を。同字を用ゑばして

書らへを。さて一字づひきを形ちて書たる趣形。

さて歌の一二句を。手本を若宮よ奉る意とき志ゆ。春

よ佐さふるとハ。春の宮と申に称よせなり。すをつ

をりてや云々を。是も下よ引く梅枝巻ゆいといをう

筆ゆみ志る々しれありて。書形しぬへりと冥る詞

よ考合ゆゆゆし。さて又土佐て。安倍仲麻呂のもろ

ちしよさまを青海原形歌よみ記よ。其國人ゆをしとも

ゆどよさまを書出して云々といへるハ。ちゆ漢字の事

よを。漢文ゆ切意を書て見せなる由形るを。此日記女

の書ゆさまにものせるゆて見ふようて。志らい冥るよて。ゆ

こふをとゆもじといへるとハ。女手にて草假字形。

いさらゆ志らゆ志とゆ形。まゆ

ちらぬ紅葉と色と移ろふふらしちぢのあともと
まらざりけり。二三の句は歌の事をかくして
詞形容上句おもいろはぞおえちらぬと人形とらを云へり紅葉とを色ハ匂へどのうくして
むものぞと形容三句のうさふらしハいろは歌おひ
びおせたる趣とき古ゆ下句ハもろ古しまく鳥跡を
見て文字を製り新発明と云ふる故事をいふる
て一首の趣ハ已が手のたゝきよしをのべて冥り
くさきる意をふくめて情あり三の句印本きこえず
たゝ形ハ一本
よりて引り。さしつぎ。とぶ鳥にあとなるものと
ちらるきぬ。雲路をふかくふみあとひ形ん。とぶ鳥古ゆてを
雁をいふる形容しハ万葉おの天飛やとまくら詞ゆも
よ発明一首ハ例の雁を書札の往来の事ゆそへそよ
みおせる形容其ちさの意ハ此物語形容へ
ゆて意得ハし三の句おきも一本ゆよる
たの形。ゆしへも今ゆくさ形もみちく。思ふ心

ありこ形容る形よ形容み。こちく思ふ心ありとを形容
いふ発れど片假字といふ冥を女手をのみ
道々ゆよりて是もの発れも用ひきれる形容ちひゆて
一むれおらぬもの形容世の事も此趣形容る事を忘ゆて
ひそと云へる意とき古ゆ一首のちさの意ハ古きも
此物語の趣ゆよりて
あぢをひて知るハし。あ〳〵でそ古れよくすむとも見
えで行水の袖おも発ふもたえぬあるう形。二句のて
よむハし上句葉手書の水ゆそへきる詞あり。すおハ
もの書く上ゆいふ詞形容源氏物語梅枝巻おも見ゆ
下ゆ引ハし袖おも目ゆもを上の行水をうけて涙の
事にいふ冥るあり。おれも一首の本意を物語のおもむ
きゆよりてよ
み味をふべし。とゆ空おほきふ書て。一まれふちく。
見ゆひて。いとをしく。よろづのことふ手をおのみた
まふ人のさゆ〳〵ふ書ゆへるかお。同物語蔵開巻おも
からのちれし

をかしなりて。大のさうしは作りて。ほつさ三寸ばかりにて。一ゑを例ゐ女手。二くだりふひとくだりかき一ゑをさうくだり同じおと。一ゑをのこさかんなおひとつハあしでおづ例の手をよまさせぬふ。ともほり。例の手とハ。女手ゐり。狹衣ふ。おゐ形のおどかきおぜぬへるをゐれど。扇ふ。草假字は真字を書交へゐる由ゐり。ゐくだる舟人のぢをたえおどこのへもくかゐきたるを云々。源氏物語繪合巻ゐ

る須磨の巻ゐ繪詞の事をゐ賞る詞は。さうの手に。かんなのところくはあ紀まぜて。まほの日記はほたほらばあれるる歌おどもおじきるたくひゆらしう。たきもあとくおほさび。真字を草ゐ手ふ書たる中に草假字をとおろくに書交へさる由おり。上ふ舉たる土佐日記のをとこのすゐる日記といふものを云々。とほる文ふ考合すべし。

竹川巻は見ぬへとおぼしうて。かおかちふ書て。とあるハ。薫より侍従のもとへの文を。玉葛の見ぬまむ意おらびして。目やすく假字がちにもゐして。よの常ゐ草字をむ少し交へぬへる趣あり。初子巻ふ明石の上ゐ事を。手習とものゐれうちとけたるもすぢかたりゐ由おある書ざまゐ形。ことくすくめやすくはすくすく書すさびたりとも云へり。

榊巻は朝貞の齋院の歌書ぬへるさまをさぐせる詞は。御手こまやかはあらねど。らうくしう。さうゐどをろしうゐりにゐり。と云へる御手こまやかはあらねどとを。歌おおぬへる手の假字ゐさゐ。さうゐどをろしうとを。それふ書まぢへぬる。よのつねの草字ゐり。梅枝巻ふ。草紙の箱どもふ入るゐき草紙どもゐ。やがて本手本はもおふ法きをえらせぬふ。はよへのおみおゐくはの御手どもの世ふ名を残しぬへる巻ぐひのも。ゐ多くさふらふ。よろづの事昔はを

源氏紫式部ノ手ヲ言

おとりざまに。はさくなりゆく世の末なれど。かんな
のみなん今の世ハいときちかくなりたる。ふるきあ
とハ。さゞまなるやうにもあれど。ひろきこゝろゆた
かならば。一すぢにかよひてなんありける。妙(たへ)にをか
しき事ハ。とよりてこそ書いづる人々ありけれど。かん
なのみなん今の世ハ云々とえ。假字のさは。今の世ハ
かぎりなく。めでたく書なすやうになれり。古の手の
風(ふう)え。法則さゞまなるやうにえはれど。心せぞくゆゝ
かならば。是も彼もひとつ風(ふう)に見ゆとあり。初音の巻
に。手習どものそゞれ打とけたるも。すぢかはり故あ
る書ざまなりと云へり。是今の世ハ。きえなくありさ
なと云へる趣と聞ゆ。若紫の巻に。紫上の幼き時のさ
まを云へる詞に。いとわかきぞおひさきゝえて。ふ
くよかにかいまへり。今めかしき手本ならはゞ。いと
ようかいまひてんと見まふ。などもいへり。末摘花巻
に。末つむ花の君は源氏君に返りことしまふ文(ふみ)の書
ざまは事を云へる詞に。紫の紙は年經にけれバ。はひ
おくれふるめいたるに。御手ハさすがにもじつよう。
中さゞのすぢにて。かみしもひとしくかいまへり。見（源）
るあひなうちおきまふ。と云へるえ。假字のもどもの
體のたをやかならば。中古の風なるが。ちらし書にも
せで。上下等しく書列ねるが。料紙さへふるびて。す
べそ今めかしからば。をかしからぬ由なり。さるハ此
末つむ花の君は父常陸宮え。古風を守りなんな趣な
るにあはせて。古の君も古代なるさまを。かくハ云へ
るなり。是も又思ひ合すべし。はやく堤中納言物語ほ
どほどの懸想は巻に。男の歌書ておくれるを。女の見
たる詞は。今やうハ中々はじめのをぞしまふなる。云
云又女は返歌書たるを以てる文に。今やうの手はか
どあるにかきみだりたるまを。ろしと思ふにや。まも
らへてゐるを。云々とあり。上に舉たるおとく空穂
物語の國讓巻に。それ昔のぞとて云々とあるもみな
其世は風をよしとせる趣なり。さて又此源氏物語作
れる寛弘は頃ハ。手書の行成卿。よはひ四十あまりの
時に當れり。その紫式部の日記寛弘五年は條に。夜べ

の御おくり物今朝そこまゐる云々手箱ひとよろひ〻〻つ方ゐて白たち志きしたくり〻〻る御草紙とも古今後撰集拾遺抄その部どもて五帖ゐつくり侍〻侍従の中納言と延轉とおの〻草紙ゐとつゐ四貫を充てつ〻書せゐへり云々このけごの上へゐ入き〻〻り下ゐハ能宣元輔やうのいゐ〻へ今ゐ歌よみどもの家々ゐ集ゐき〻り延轉と近澄のきみと書たるハさるものゐて これハき〻〻けぢゐうもてつゐをせゐふべきみしらぬものどもに志ゐさせゐへる今めゐしうさゐこと ゐり とも い ゐり其中納言を行成卿ゐさらゐり延轉法師近澄ぬしゐどもゐをゆるきハゐく今ゐ〻しく嫉ゐをゐしき手ゐたゐて女手を心ゐいきてゐらゐしさかりゐぞありゐむ

ことも ゐき手本多くつどへたり〻中に中宮ゐは御息所ゐ心ゐいきゐず はしりゐ ゐいゐへり〻一〻〻りばゐ里 はしりがいゐへ里〻とハ はしり書ゐり 幣木巻ゐ見え〻〻 下に引くぢし わざと

ゐらぬをえて ゐたことにおほえしはや云々宮ゐ御手をゐまやゐにをゐしげゐきどかどやれくれたらんとうちさ〻ゐきてきゐえゐふ故入道の宮ゐ御手ゐ心ゐ志ゐしたふゐうゐまゐ志ゐ〻るすぢハあ里〻ゐどゐよゐきとゐゐ有て ゐほひぞすくゐゐ〻院の内侍のゐみこそ今ゐ世の上手ゐたちおゐたきどゐのゐりそほきてくせぞそひたゐる さハありとも かのきゐと前の齋院とゐ〻ゐ紫上を指きとこそはかきゐたゐ許し（二ル）ゐたこえゐへむ此數ゐたおばゐくやとゐたこえたまへむ紫上の詞件の二人ゐ立ゐらびい書む車のゐづかし（源詞ホコリカニチノモラヒ言ヘ）ゐたゐと ゐり すぐ

しなひそ。にぶやう形るかゝる形つゐしさハこと形
ゑものを。假字を柔和(ニコヤカ)ゝ書たるを見まむ。其人がらの
形つゝしさも。殊更ふおぼゆるものぞとゐ
ゑ。まんゐのいろみたるほとに。のん形ハ志どけゐ
もじこそまじる色きとて。まんゐハ真字ゐて。たゝの漢字形ゝ。古のほど真字形
書ざまハ善くゐりなへゝ。それふ合せてハ。假字ハ志
どけゐきゝまじる色き心をいれて能く書なへと心
をそへなゐるおもむきゐり。さて此詞ゐ。假字ハ真字
ようもよく書得る事の難きものぞといふる意の。ゐ
もりてきこゆ。云々。例の源寢殿ふたゐ色おちしまして書なふ。
云々。御心のゆくかぎり。さうのもたゝのも。女手をい
みじうかきつくしなふ。草字をも。假字をも。殊ゐ女しく書なふ形ゝ。云々。
兵部卿宮わとりなふとゐおゆれむ。云々。かの御さう
（紫イヒノ手イヒヤ）

しもつ持せて引ちりなへる形ゝ。やゝて御（源）らんず色
兵部卿
む。すぐれてしも有らぬ御手をたゝかゝとあどに（篇木巻ゐ）
かどくしくけしゐ形ぞちゐ色む
云々とあり。其文下ゐ引くばし。ゐ色いとう筆すゝ
たるゐしゐありて。書形しなる字。筆すみたるとハ。古注ふ。あゝのぬけた
る形ゝとなり。下ゐ左衛門督の手
ゐ論の詞ゐ合せさとるべし。歌もゐとさら色き。
そむみたるふることゝもをえりてたゝ三くゞ字ば
かりふ。もじばくゐふ。真字ばくゐゐ。このゐ
ぞのゐなへ法。ゐたとゝ御らんしおとろきぬ。（源）あうまで
ハ思ひなへゐこそ有ゐつき。さらに筆形げもすつば
しやとねゝさゝりなふ云々。（源ノ手）さうにかきなへるをぐれ

て発ぐたしと見ゆふる云々。おほどろ形る女手の。（是モ源ノ手ヽ）
那はしう心とぐ発てゐ記ゆ写る。上ハ御心のゆくゐ
のも。女手をいみじうかきつくしたるふ。賜應して心得ぼし。きりさうのもたぐ
ゆふとなるよ。たとふぼきゐ無
しみゆふ人形涙さへ。えぐ形ぐ記よおぐれそふあ〜ち
して。なく世あるはじ形ふ。又云々。みざきたるさうの
歌を。筆にまゐせてえぐれかきゆへるさ毋みどころ
のぎり形し。ゑざきさうの歌を云々ハ。真假字を
極草みて。歌をみされ書ふものしゆへる
ゆ形り。云々。左衛門督形ハ。こと〜〜しうかしこげ形る
きちをおのみて書たきと。筆のおきてすまぬこゝち
して。いとさりくちへたるけしたゐ写。上ハ兵部卿の
御手形事をい

きう筆すみきるけしきなりて書形しゆへ写。となる
を。ち〜形筆のおきてすまぬこゝちして云々とあ那
よ。合せて心得ぼし。云々。ゆふハまゝさ手形事どもの岩まひくら
して。さまゞ〜形ぼき紙形本ども（古き巻もの形手本形）えり出
させゆへるつゐでゐ。云々。此比ハたゞ〜ゐんゐのさざ
発をしゆひて。世の中よ手かくとおぼえゐる上中下
形人々ふ。さるぼきものどもおほしはうらひて。とぶ
ねてかゝせゆふ。此處形文。ゐのゐもしの書ざま。手のあ
しさよさふ。ふろく心をおぼてさざ
せるもの形り。此ぢろハきゞ。ゐんゐのさざめをした
まひてとかゝるをも思ふべし。さて梅枝巻の此段形
文をむ。源氏君の假字がきの
ちゐさざ発とや云もおし。同箒木巻よ。手を書たる
ゆもふろ記事ハゐくて。ち〜かしたのてん形ぐよは

しるべき。そこはらとおくくゝしたゞ免るを。うちみる
よかどゝ〳〵しく。けしきおもちられど。紫式部日記に和泉式部といふ人
ちそおもしろうおきかちしくゝそされど和泉ハけし
のらぬゝさこそなれ。打とけてふみちしりのきさる
よ。そのかきのさえある人。むろおもかるめ。おほまおとのすぢ
い詞おほひも見え侍るを。梅枝巻に。宮の御手を。ちま
をこまやゝふ書得たるを。やゝふを〻しげかきど。か
どやおくれたらむ。榊巻ふ。御手ちまやゝよえあらね
どらう〳〵しう。草おどをゝしうかりふきり。と見え
ゝり。上にも引きれど。ちゝ
の詞に引合せてまゝかむ。うちべの筆おえてみ西き
ど。今ゑとたびとりおらべて見れど。おかぢち實おに
あむよりゝる此文をも。前の假字さゝ同榊巻ふ。源氏
君の紫上おの事をのゝさまへる詞ふ。御手はいとをゝし

うのみおりおさるものの。おとひとりごちて。うつゝ、
しみほく恵をのふ。常ふかきゝはしのへど。ヒゲ御手
よいとよく似て。いまはちしおま免ゝしう。女しおと
ちろかきそへの字。おかいくらもありぬべゝきど。
ことさらにえもと免も出ぶ。因に云ふ。續世継。藤波中
白忠通公の事を申せる下に。巻三笠松段に。法性寺関
しおに上手にもちぢおちし。手かゝせのふ事ハ。むゝ
おのもしく。いま免ゝしおろ。真字も假字も
れれしまし。内裏の額ども。せのふ
たるをぞさらにゝ。ふとそうけのそうし。院宮
の御堂。御所おどの色紙形ハ。いゝばのりかえ多くか
ゝせのひし。御願よりちぢ免て。寺々の額あどゝばゝ
かせたおえき。云々。又水くおの巻ふ。宰相中将教長朝
臣おに事を云へる下に。手書に言にもおえにとぞ。とちろぞ
ちろの額あども書ききまふ。又御堂おに色紙ぞゝ

なども書き給ふとぞ聞こゆる。佐理は兵部卿の真な
様をぞ好みて書き給ふときこゆる。さればハ法性寺の
おとゞ（忠通公）御こゝろなる遠し。花園のおとゞ（源有仁公）
もさやうのすぢに書せ給ふとぞきこえさせ給ひし。
宇治の左のおとゞ（藤原頼長公此公ハ事をぞ餝段御手あまの殿ハせいかふ殿を法性寺詩作我らむとす…）
人の問ひに朝隆教長いづれか勝まさると。時忠ときこえし
くて。とりどりに善く書き侍るとぞ答へ申てし。定信
なきみ人にあさられたるを。たびたび問せ給ひけ
るにや。申きられはたりともきこえ侍る。ちざへと骨
とに譬へまゐりしとかや。その入道（定信）ハ人ふあさられけ
る。朝隆の中納言ハ。行成の大納言の消息ゆゝしくう
つしにせられけるとぞきこえ侍る。その消息も
さぬ人なく世に多く侍るなり。教長の御手も。さねざ
まで京ゐなかにつたへ侍るなり。宮内大輔（藤原定信）も
どりのすぐれたるふみなにろと。すぐさず書ひろ見侍
まゝり。いろに本れほく侍らむ。道風のぬしないま
ありたる世にこそ。ひとくぐりたさぬ人ハ。恥に思ひ

はべりしを。宮内大輔も。大納言（行成）のすゑなれぞ。よく
似らるべきに侍れど。むかしのやうを傳へられざる
にや。常にきゆるやうにもかゝりてぞ侍るなる。これは
ぢの朱雀の治部卿（藤原行経卿なり。実ハ定信朝臣の曽祖父なるを）
るといへるは。御手にぞよく似てぞ侍るなる。その定信の
きこえ。一切経を一筆に書きたまへるきこえ人ともれば
えなりぼ。世になきことにこそ侍るなれ。五部の大乗
経などだに。ひとりかく侍るに。いときふと聞ちぎり
むすびなんへる人なるほし。又僧正行尊の事を手書に
もおぼえして。かゝる人の手本など世にとゞまり侍るなり。
なれど云ふるあと見えざり。さて件の定信朝臣の一切
経を一筆に書きなんへりといへるにつきて此考書に
むつきなけれど。そのちなみにいふ。伊藤長胤の秉燭
談に。僧安覚が事を挙て云。寛文二年松浦侯家人侍医
西脇文安ノ記ニ曰。筑前國宗像ノ祠ノ座主有色定坊ト云者。手ツカラ写ス大
蔵経ヲ。文治元年乙巳二月十九日起筆。至兼元三年己巳
二月十六日卒業ス。時ニ年五十一。三月十六日供養ス。以テ業上
僧正栄西ヲ為導師。兼久二年六十二而終ル。写蔵経未了ラ。入ル
宋ニ号安覚ト。宗像ハ云々祭ル田心姫ヲト云り。其後花山院藤
公世々是を祭りなふに因て此を尋ればバ。家蔵の古記

よも安覚ゞ事を詳よ記し。其人鶴林玉露よ載とうと
のこまゝうとゝ。その文を挙載せり。其もろ〳〵宋
世ゐ羅大經ろ著せる書ゝり。其文よ云。余少年時於鐘
陵。邂逅日本一僧名安覚。自言離其國已十年。欲盡記一
部蔵經乃帰念誦甚苦。不合晝夜毎有遺忘。則叩頭佛前。
祈佛陰相。是時記蔵經一半也矣。夷狄之人異教之徒。其
立志堅苦。不退轉至於如此。朱文公云。今世學者讀書尋
行數墨。備禮應數。六經語孟不曾全記得三五板而望有
成。亦已難矣。其視此僧殆有愧色云々といふり。松下見
林ゞ異称日本傳よも此文を挙て云。按安覚者釈經祐。
姓色條氏。本名良祐。号安覚。千光國師弟子也。嘗入宋。帰
朝之後止筑前國田嶋香正寺。汲彦高根神泉前在豊滴為
硯水。手自書寫一切經。義元元年十二月終其功。筆畫楷
正。今猶存。と云ふり。安終記功との差年胡り文。秉燭談ま云。近
頃又香月牛山翁よ對談せる序此事を語れバ。其蔵經
至于今存在。嘗て一覧せり。料紙皆當時源平の諸將
名ある輩。或ハ一帝。或ハ二帝を喜捨して助成す。帝背
よ各其姓名を書つけとぞ。因ておもふ。そのかゝ
み世間よ。帝筆甚大切よして。まと人の精神甚つよく。
志慨甚ゑとかりし事ゐきまてみるばしと云へり。ま

ゐとよ然るゐとゐり。さて其一切經。虫飡腐壊ゐどせ
るゐゐうへゐ人よも分与へゐどして。今も全くを存ら
ほとぞ。おのれ前よろの國人よのつらへいけて。其い
さゝろゐる一ひらを得て。障子よおして。常ゐ見ゝそ。
のきもつよき志を考でしのぶる心のすさびよ。此よ
書そへきるよゐむ。さゝまゐと假字をあしく書きるさ
まを大假字といふり。著聞集よ下野種武ゞ事をいへ
る下よ。大ゐのいまゝしげゐるまて。種武ゞ馬馳
たる證人候ゝ。ゆろふまつらんと書たり。又蒔繪師
ゞ事をいへる條よ。ゐのさまゝしゐ大ゞゐまて。御返事を
ぞ申ける。ゐど見えゝ。又いとつたゐき書ざまゐる
をゝ。ずゐきと云へる事ゐり。栄花物語水綿幣巻よ。
姫宮ゝ。ばがゐよせさせゐへるを。信明集ゐ詞書ゐ。
返りことよ。ゝばがゐよせきをしておこせゝ。さゝ。長明發
心集よ人の死期ゐ時のさまをいへるところよ。帝と
筆とを賜へ。あらゝ書付むと云ふ。すゐちとらせ
きれゝ。手もとあゝ。ゐゝ。ゑゝ。ばゝ。ゝづろよ書つけた
るゝ。たゞゝぬゝ。ばゝ。ばゝ。おどみゐ。今も云ふ言
ゐり。又洞物語國禅巻よ。窪手ゐ蓋よ。ゐまゐ女の手よて
云々とあるも。假字をゝろく書たるを云へるゐり。さ

て中昔草假字を和字と云ふる事きこえたり。吾妻鏡
建久四年の條に修佛事捧和字諷誦文。貞永元年の條
に武州以五十箇條式條相副和字御書被遣六波羅。
などあるこれなり。又祇園の社家に藏てる古文書は中
にも正安元年感神院領訴事はきこえ六波羅に政所
の下知狀に訴陳の文書を真字にて書つらねたる中に
以和字換漢字と分注せるゞあり。其れ本の文書は草
假字にて書たるを和字といひて。それを真字に換て書
つらねたる由をこゝとわきまへる形り。仙覺律師の万葉集
に跋に和字といへり。さて吾妻鏡元久二年の條に
將軍令好和語給云々。とあるも。歌の事
なり。右の和字と記せるに合せ見ばし。